慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	結婚、不義密通そして愛 : ユゴー・ サンド・ ドビュッシー (その1)
Sub Title	Le mariage, l'adultère et l'amour : Hugo Sand Debussy (1)
Author	小潟, 昭夫(Ogata, Akio)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.47 (2008.) ,p.41- 68
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学文学部総合教育科目「愛とセクシュアリティ」発表報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20080930-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学文学部総合教育科目「愛とセクシュアリティ」発表報告

結婚、不義密通そして愛

——ユゴー・サンド・ドビュッシー（その1）

小　潟　昭　夫

はじめに

フランス国立統計経済研究所によると、フランスで2006年に生まれた赤子の半数以上が、両親が正式な結婚をしていない婚外子だったという。婚外子が多数派となったのは初めてで、「家族」の在り方をめぐり、形式にとらわれない最近のフランス人の考え方が反映されたのだろう。同研究所の統計によると、2006年にフランスで生まれた赤子は約83万人。このうち50.5%が婚外子で、結婚している両親から生まれた嫡出子を上回ったのである。これは驚くべき数字である。2005年の婚外子の割合は48.4%だった。フィガロ紙によると、1960年代には婚外子の割合は1割程度にすぎなかったとされ、フランス人の結婚観が激変した模様。フランスでは1999年、同性愛のカップルや事実婚の男女に対し、税控除や社会保障などについて結婚に準じる権利を付与する法律が公布され、結婚観の変化に寄与したとみられる[1)]。結婚制度が大きく揺らいでいる今日、19世紀の作家や芸術家の生き方の中にその端緒を探ってみたい。19世紀という激動の時代にあって、男女の関係は大きく変貌を遂げつつあった。フランス革命、ナポレオン帝政、王政復古、ルイ・フィリップ王政、ナポレオン第二帝政、共和政といった目まぐるしい変化の中で、結婚制度や男女の関係、そして愛とセクシュアリティーはどのように具現化されたか、19世紀最大の詩人ヴィクトル・ユゴーと、19世紀の先駆的女性作家ジョルジュ・サンドそして19世紀における音楽的革命児クロード・ドビュッシーを検証してみたい。

(1) ヴィクトル・ユゴーのセクシュアリティーについて

ユゴーの父レオポルは、性欲の強い男だった。ユゴーの誕生のエピソードによれば、父と母は、リュネヴィルからブザンソンへの旅の途中、山中の散歩に出かけ、ヴォージュ山脈の最高峰ドノン山の頂上で、つまり白雲の間で身籠ったということである。兵士であった父は、妻ソフィーに性行為を激しく迫っていたと思われ、妻はそんな夫に嫌気がさして、パリに戻り、ナポレオンのお尋ね者であった旧友の愛人ラオリーを匿ったりしていた。ヴィクトル・ユゴーの両親は、夫婦喧嘩が絶えず、別居状態が続いた。そのうち父レオポルは、カトリーヌ・トマという愛人を作った。本来的につまり遺伝的にヴィクトル・ユゴーが、精力絶倫の家系に属していることは、ユゴーの生涯を貫く罪と罰の系譜に位置づけることができるかもしれない。

ヴィクトル・ユゴー

アデル・フーシェ

あんなに性欲があったにせよ、新婚初夜までユゴーは童貞であった。このことは何を意味するのか？　純潔を守ったということであろう。が、肉欲は相当激しかった。『レ・ミゼラブル』のなかで、マリユスがコゼットへの欲望について、肉体のない肉欲という表現を使っている。婚礼の夜は、神聖なものであった。どんなに激しい性欲を発揮したとはいえ。実際、1822 年 10 月 13 日、新婚初夜にユゴーはアデルと 9 回性関係を持ったと、後年語っている[2)]。しかし、それ以上に悲劇的なのは、その晩、兄のウジェーヌ・ユゴ

Eugène Hugo.

ーが発狂したということである。兄ウジェーヌも、密かにアデル・フーシェ嬢に思いを寄せていたのだった。弟ヴィクトルに恋人アデルを奪われてしまったウジェーヌは、パニックに陥り、言語障害を起こしたとのことである。

結婚にいたるまでの過程で、ユゴーはアデルへ手紙を書くことで、己の気持ちを伝えている。離れ離れのコミュニケーションの中で、非物質的な不滅こそ二人の愛の姿である。そこにセクシュアリティーがどのように入り込むのか、愛の保証は、二人の眼差しが通い合うこと、アデルの髪の毛の束にキスをすることなどで、直接アデルの身体に触れることができない状況で、欲望のスピリチュアリザシオンが繰り返される[3)]。

結婚後は、1823年11月23日に第1子、1824年8月28日に第2子、1826年11月2日に第3子、1828年10月21日に第4子、1830年7月28日に第5子。27歳になったアデル・ユゴー夫人は、身体の具合が悪くなり、打ち止めにした。

「きみがいるはずの（きみはもう望まないけれど、意地悪だね）あのベッド、きみのドレスやストッキングや装飾品が肘掛け椅子に散らかっているのが見えるあの部屋、きみがキスでぼくをじゃましにくるあのテーブル、それらすべてはぼくには悩ましく痛々しい。ぼくは夜眠れなかった。ぼくは18歳のようなきみを想っていた。ぼくはまるできみと寝ていなかったかのように、きみを夢みていた。」（1831年7月17日、アデル宛のユゴーの手紙）

1831年春から1833年2月16日までの3年間、ユゴーがセックスなしで過ごしたかどうかは極めて疑わしいと、アンリ・ギユマンは言っている。

ヴィクトル・ユゴー
詩人・劇作家

アデル・ユゴー

ヴィクトル・ユゴー 30 歳
（レオン・ノエル画）

サント＝ブーヴ
批評家

アデル・ユゴー
（ブーランジェ画）

サント=ブーグ
（ドゥマリ画）

サント=ブーヴとアデル・ユゴーが親密な間柄になったことを知ったヴィクトル・ユゴーは、いわばコキュ（妻が寝取られた男）であり、絶望したのである。そういう魂の状態のときに、ジュリエット・ドゥルーエが現れたのであり、ヴィクトルが、水を得た魚のように振舞ったのも首肯できる。

その女は火の鳥のように行ったり通りすぎたりしていた、
知らぬまに多くの男の魂に点火し、

ジュリエット嬢
（レオン・ノエル画）

ネグローニ公爵夫人・
ジュリエット 1833

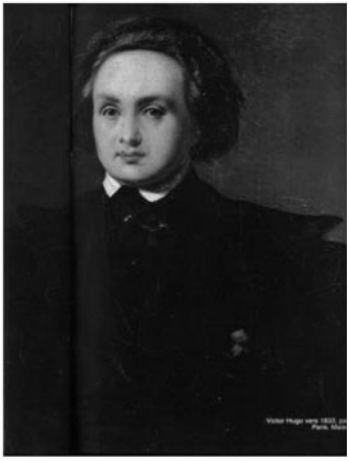
魅惑する足取り一歩一歩に釘付けになった眼に、
いたるところから、まばゆい光を放ちつつ！
おまえは彼女に近づけず、じっと見つめたまま。
だって火薬の樽は火花が怖いから。

『内心の声』より

ジュリエット・ドゥルーエという女性はどういう女性なのか？　本名ジュリエンヌ・ゴーヴァン、1806年フジェール県に生まれたが、生後8ヶ月で母が亡くなり、翌年父も後を追い、いわば孤児になった。10歳のとき、ベネディクト会の修道院寄宿学校へ入ったという。1825年19歳のとき、彫刻家ジェームズ・プラディエのアトリエに出入り、モデルをしていた。ジュリエンヌは、美しい顔だけでなく、美しい締まった身体の持ち主だった。1826年、プラディエとのあいだに、クレールという娘ができたが、未婚の母。1827年、プラディエはアカデミー会員になると、身分に相応しい結婚がしたくなって、ジュリエットを演劇の方へ押しやってしまうのだった。しかしこのことは、無収入の女性にとっては、過酷な人生の選択となった。ジ

ュリエットは、生きるためか、次々と自堕落な男関係に身を任せていた。自分よりも25歳も上の53歳になるイタリア人彫刻家バルトロメオ・ピネリ、文無しの舞台装置家シャルル・セシャン、小説『菩提樹の下で』の小説家でジャーナリストの2歳下のアルフォンス・カール、さらには暇人でお金持ち、エキシエ街に豪華な部屋を借りてくれたアナトール・ドミドフ公。アルフォンス・カールは、ジュリエットに結婚の約束をしながら、彼女からお金をせびり、彼女に売春の仕事をさせるまで迫っていた。

1827年のジュリエット・ドゥルーエ



1833年頃のヴィクトル・ユゴー

「私の＜肉体＞は、色々望みを持っていますが、私の＜心＞も望みをいくつか持っているような気がします。そしてそれは何千倍も激しい望みなのです。……あなたの与えてくださる快楽には、疲労と恥辱がつき物ですが、私の夢みているのは、それとは反対に、静かで、むらのない仕合せなのです。……あなたは私の＜肉体＞を愛し、いとおしんでくださったのですが、それとは反対に私の＜心＞をいとおしんでくださるような男の方を見つけることができましたら、私はあなたとお別れします。あなたを捨て、この地上を捨て、命さえも捨てても、惜しいとは思いません。……[4)]」

肉体の欲求よりも心の欲求が強いジュリエットにとって、アルフォンス・カールが求める肉体的な要求には辟易しており、心をいとおしんでくれる男、「静かでむらのない仕合せ」への希求を彼に伝えている。ジュリエットの精神性への希求は、肉体に任せた生活に対してノンと宣言しているわけで、娼婦的クルチザンヌ的性生活ではなく、自分の精神生活を豊かにしてくれる男性への希求なのだ。ジュリエットが少女時代に修道院寄宿学校で暮らしたことが、彼女の精神性への希求に繋がっていると言ったら、早計だろうか？
そして現れたのが、ヴィクトル・ユゴーという詩人で小説家で劇作家なのであった。

1833 年 2 月 16 日から 17 日にかけて、ユゴーはジュリエットと不義密通を犯した。というより、ヴィクトルはジュリエットという愛人を獲得したし、ジュリエットは身も心もゆだねられる真の男性に出会えたということだろう。1833 年のカーニバルの夜、「 お前の一生を変えてしまったあの神秘的な時 」、「ひとつの象徴」「 神秘と孤独と愛とにひたるために 」、世間の喧騒を置き去りにした祈念すべき夜だった。「 ダイヤモンドのように輝く澄み切った瞳、あかるく冴えた額。……彼女のうなじや、両の肩や、両の腕には、古代の芸術そっくりな完成された美しさがそなわっていた。……」（テオフィール・ゴーチェ「マドモワゼル・ジュリエット」）「ブルターニュの女に特有な、かたくしまった乳房をもつ」ジュリエットの肉体が、ヴィクトルの気に入るようなしぐさをやりつつ、愛のあらゆる動きに身をゆだねる。神聖な夜に、彼女は、30 男に快楽の扉を開いたわけで、「2 月は私にとって特別な印がつけられた月でした。1802 年 2 月 26 日、私は生命が誕生しました。1833 年 2 月 17 日、私はお前の腕の中で幸福のうちに生まれました。最初の日付けは命に過ぎない、二番目の日付け、それは愛である。愛することは、生きること以上である。」（1835 年 2 月 26 日、ヴィクトルからジュリエット・ドゥルーエへの手紙）

他方、ジュリエットはドミドフ公が彼女に与えた豪奢な生活を諦め、火の鳥になったりネグローニ公爵夫人になることはやめ、絶対的な愛が彼女にもたらしたオランピオの真の妻になろうとする。過去の穢れた生活については、

決して話題にしないというヴィクトルの神聖にして厳かな約束を信じて、ジュリエットは「私の過去の人生、愛のない人生の様々な結果に堪えなければなりません」といい、「殉教者のように、私たちは天上の人生を、私たちが一緒にやり直す新しい人生を、忘却と幸福と私の魂のように純粋な幸福の人生を見い出すでしょう。だって私の身体が穢されたとき、私の魂は純粋のままでしたから……」と、伝えていた。そしてその後毎夏ヴィクトルとジュリエットが行うことになる旅行の経験のおかげで、彼女は秘密の結婚に結ばれているかのように自らを考えるようになり、「ああ、そうだわ、私はあなたの妻ですよね、愛しいひと。あなたは赤面することなくわたしに打ち明けることができるわ、でもわたしの一番の称号は、わたしが何よりも保ちたい称号は、あなたの愛人の称号です。情熱的で、熱烈で、献身的で、生きるためにあなたの眼差し、幸せになるためにあなたの微笑みしか当てにしない愛人の称号です。」と、1839 年 9 月 18 日の手紙の中で、ジュリエットはヴィクトルに書いている。

1843年9月4日、ヴィクトルとジュリエットがスペイン旅行から帰る途上、セーヌ川下流のヴィルキエで、娘のレオポルディーヌと夫のシャルル・ヴァクリを乗せたヨットが転覆し、二人は帰らぬ人となった。9 月 9 日、ロシュフォールのとあるカフェでビールを飲みながら新聞を手に取ると、彼らの死を知った。「自分の子供たちのことはろくに面倒をみてやれないで、ほかの女にうつつをぬかしているような男は、無責任な父親として神の罰を受けるのではないだろうか。」(9 月 10 日付ヴィクトルのルイーズ・ベルタン宛ての手紙)

「官能はしびれるように激しい。精神がひどく混乱すると、自然のいきおいとして、人間はさまざまな激しい肉の快楽に耽って忘却を追いもとめる[5)]。」と、アンドレ・モロワは、『オランピオあるいはヴィクトル・ユゴーの生涯』で書いている。

1845 年 7 月 5 日、ヴィクトル・ユゴー 43 歳は、レオニー・ビヤール・ドーネ 25 歳との姦通現場を踏み込まれた。レオニーは、ジョルジュ 11 ヶ月、マリ 4 歳の子供がいたが、夫ビヤールと不仲で、一人で居を構え別居してい

レオニー・ビヤール・ドーネ

レオニー・ドーネ

た。そこに現れたのが、ヴィクトル・ユゴーなのである。「愛すること、それは他人に、一種の創造力によって、卓越した実存を与えることだ。愛されること、それはそれを受け入れることだ。」 夫と別居していたとはいえ、レオニーのポジションは脆かった。法によれば、彼女は夫婦の正当性を得ることなく、まだ夫に貞操を守らなければならないのであった。レオニーは逮捕され、サン＝ラザール監獄へ収監された。ユゴーは、貴族院議員不可侵の特権で、逮捕されなかった。が、ビヤールは攻撃的だった。国王ルイ・フィリップは、画家ビヤールをサン＝クルーに呼んで、彼にヴェルサイユ宮殿の壁画を描く仕事を与えて、告訴を取り下げさせた。妻アデルは、夫の罪の告白を聞いて、夫を許し、牢屋に出向いて、ビヤール夫人を見舞った。しかし、愛人ジュリエットは何も知らなかった。やがてアムラン夫人の仲介で、レオニーはアウグスチノ尼僧院へ移された。

19 世紀フランスでの女性の地位と離婚について言えば、1792 年、フランス大革命は、離婚を認めた。1804 年、ナポレオン法典では、女性は夫の権威の下に置かれた。妻の不倫は重い刑罰を受けたが、夫の不倫は認められた。女性は、彼女が男性に子供をつくるために、男性に与えられたのである。したがって、妻は夫の所有物なのである。「女性は契約によって得られる男性の所有物である。女性は動産である。というのは、所有が権利証書に値する

からである。」（バルザック『結婚の生理学』1829）結婚が女性から彼女の財産の管理のような本質的な権利を奪うならば、身体の離別（別居）は、いずれにせよ、彼女を困難な状況に落とす。一人の女性にとって、夫や、家族の支えなくしてどうやって生きるのか。

「男性全ての馬鹿なエゴイズムこそ、贅沢な恋愛以上に、フランスで生活する高級娼婦の恐るべき数の原因なのだ。男子のためには、たくさんの無償の学校があり、中央学校、工芸学校があるが、女性たちには何もない[6)]。」（オランプ・オドゥアール『男たちへの戦争』1866）

1845年8月14日、夫婦の間で、財産分割と別居が宣言された。アデル・ユゴー夫人やアムラン夫人の後ろ盾もあって、レオニー・ドーネは王宮広場のサロン客になった。離婚した女性レオニーは、新聞雑誌に寄稿したり、本を出したりして、生活費を稼いだが、ユゴーはユゴーで彼女のために最大の援助を惜しまなかった。

1847年から1850年にかけてのユゴーは、若い女優、蓮っ葉女、小間使い、娼婦など、次から次へと新鮮な女の肉体を求めて、隠微な欲望に取り付かれていた。その中の一人、アリス・オジーはパリで一番の美しい肉体の持ち主だった。アリス・オジーは、自分の恋人を貶め、彼がどれほど零落状態に喜びを見い出すのかを図るのにサディックな快楽を覚えるのだった。彼女は恋人を辱めるために、目の前で、他の人に彼女の一番秘めやかな魅力を示すのだったが、同時に、今のところは、彼女は体も心も辱められた恋人のものだと言い放ったのである。テオフィル・ゴーチエ、画家のシャセリヨー、息子のシャルルと争い、ヴォクトルは、アリスを物にした。ヴィクトル・ユゴー45歳で、息子のシャルルは21歳だった。アリスはシャルルに父親ヴィクトルから詩を書いてくれるように頼んだのである。ヴィクトルは、次の4行詩を書いた。

日が暮れてゆくあの魅力的なひととき、
夕空が黄金色に染まるとき、
波間から現れるヴィーナスにプラトンは憧れていた、

だが、私は、アリスがベッドに入るのを見たいと思う。

闇に隠れたあのやわらかいベッドは
無数のキューピッドが
裸足で軽く触れたが、
暗い大洋に似ている。
そこからヴィーナスが立ち現れるのが見える

（レモン・エスコリエ『恋の天才』所載）

「眠れる浴女」アリス・オジー（シャセリオー画）

息子のシャルルは、父とアリスの情事に嫉妬し苦しんだ。そして以下の詩を書いた。

僕は君の体を愛し、そして憎む！君の生活を愛し、そして憎む！
ああ！愛と贅沢に身を持ち崩す君の生活、
運命はかわるがわる吉と出、凶と出る。
僕は刻一刻幸福の絶頂から不幸のどん底へと突き落とされる
僕は君を愛し、憎む。君の愛ゆえに、僕は君を愛する、

だが、君の情夫たちゆえに、君を憎む！

（レモン・エスコリエ『恋の天才』所載）

21 歳のシャルルは、父には抵抗できず、アリスに両義的な感情をぶつけた。結局、アリスは息子ではなく父を選んだわけで、「どうして僕の父にあの手紙を書いたの？　一方に、純粋な心と深い愛と限りない献身をもった息子と、他方に、名声をもつ父がいる。あなたは父と名声を選んでいる。そのことで僕はあなたを非難はしません。どんな女でもあなたのようにしたでしょう。ただこのことは判って欲しい。僕はとても弱い人間だ。だからこれから先、＜親子であなたを愛する＞というような、そんな苦しみには堪えられないでしょう」「あなたは、魂をこめて僕の父を愛していると言っています。僕にはいったい何が残されているのでしょうか？」「さよなら、そしてありがとう、父と幸せになってください、僕があなたを愛したし、今でも愛しているけれどこれ以上父があなたを愛することはないことを思い出すにせよ[7)]。」ヴィクトル・ユゴーがアリス・オジーの愛人であったということは、否定できない事実である。父親が子供に対して犯した罪が問題なのである。

『見聞録』によれば、「実物より。2 月 23 日から 24 日にかけての夜」という記述のなかで、ユゴーはアリス・オジーのところへ夜食を取りに行っていた。「彼女は高級な真珠の首飾りと不思議な美しさの赤いカシミヤの肩掛けを身につけていた。棕櫚の葉は、カラーではなく、金と銀で刺繍がされており、彼女のヒールまで垂れ下がっていた。だから首には魅惑的なものを、足には眩いものを身につけていたが、それらは、喜んで、詩人を閨房に招きいれ、王子を控えの間に待たせておく、この女性の完全な象徴なのであった。彼女は入ってきた。長椅子にショールを投げすて、暖炉のそばですっかり盛り付けられたテーブルのところに座りに来た。冷えた鶏肉、サラダ、数本のシャンパンとラインの葡萄酒。彼女は画家を左側に、私を右側に座らせた。シャセリオーをうっとりと見つめながら、彼の方にかがんで、「あんたは私のような美女を持つにはあまりにも醜すぎるわ。……セリオ（シャセリオーのこと）、あの人に私の胸を見せて欲しいの？」「そうしてください」「彼の

声は嗄れ声だった。彼はひどく苦しんでいた。彼女は笑い出した。「ほら！あの人が私の胸を見るとき、セリオ！」二人は彼女を見た。そして同時に、彼女は両手でドレスを決然とつかみ、コルセットがなかったので、前が裂けた下着は詩人たちが歌うあの見事な胸のひとつを見せていた。それで、このとき、私はジュビリ（アリス・オジーのこと）を見なかった。私はセリオを見た。彼は怒りと苦悩で震えていた。……「ごらんなさい。処女の胸と少女の微笑を。」ジュビリはドレスが閉じるがままにし、大声を出した。「ついでにあなた、私の脚を見なかった？」セリオが身振りをするまえに、彼女は踵をテーブルの上に置き、めくれたドレスはガーターまで、透明な絹のストッキングをはいたこの世で一番美しい脚を見せていた。私はセリオのほうに振り返ったが、彼は言葉を出さず、動かなかった。彼の頭は椅子の上で仰け反り、彼は気を失っていた。ジュビリは起き上がり、あるいはまっすぐ立った。彼女の眼差しは、一瞬前は、あらゆる媚態を表していたが、いまやあらゆる苦悩を表していた。「どうしたの？　あら、あんたはおばかさんなの？」と彼女は大声を上げた。彼女は彼の方に身を投げ、彼の名を呼び、手で叩き、顔に水をぶっ掛けた。……[8)]

29歳のアリス・オジーのサド的な残酷な愛の仕打ちに、28歳の画家シャセリオーは打ちのめされ、気を失ってしまったが、事の成り行きを仔細に綴った46歳のヴィクトル・ユゴーは、レモン・エスコリエに言わせれば、＜この肉体的地獄への下降を記録する器械＞[9)] にすぎなかった。

1848年は政治的な転換期で、ユゴーは公的に活躍すべきときであったが、アデル、ジュリエットそしてレオニーという三人の女性〈妻〉に囲まれて雁字搦めの状態だった。それだけでなく、進んで身を任せてくる女たちの誘惑にきわめて弱くなっていた。女優のジョゼフィーヌ・ファヴィル、ロジェ・デ・ジュネット夫人、窃盗罪の前科者エレーヌ・ゴッサン、女性詩人ルイーズ・コレ、行きずりの多情な女ナタリー・ルヌー、妖婦ロール・デブレ、フランス座の正座員シルヴァニー・プレッシー、自称デュ・ヴァロン子爵夫人、インテリ娼婦エステール・ギモンそしてラシェル[10)] 等など、枚挙に暇あらずだ。

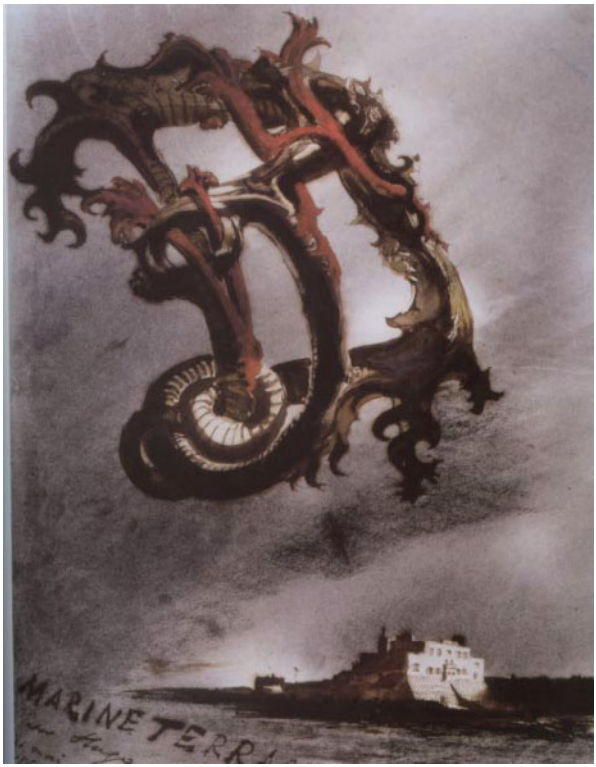
1851年6月29日に、ジュリエットが住んでいたロディエ20番地に、リボンで束ねられ、「われこそはユゴーなり」というヴィクトル・ユゴーの紋章で封印された手紙の束が舞い込んできた。1844年以来、レオニー・ドーネに宛てたヴィクトル・ユゴーの手紙であった。ジュリエットを絶望のどん底に追いやった出来事ではあったが、「私は、あなたの裏切りの証拠を容赦なく私に見せてくださったあの女に感謝しています。七年間、あなたがあの女を熱愛していらっしゃったという事実を、あの女は大胆にも私の心臓めがけて、ずぶりと突き刺したのですから[11)]。」ユゴーに首っ丈の二人の女性は互いに敬意を表したことになる。

ヴィクトル・ユゴーを女たちの争いから救ったのは、皮肉にも1851年12月2日のルイ・ナポレオンによるクーデタに他ならなかった。ジュリエット・ドゥルーエは、ユゴーの亡命に献身的に尽くした。ジュリエットに頼まれてつくったランヴァンという名のパスポートでヴィクトル・ユゴーは、北駅からベルギーへ脱出ができたのだった。「マダム・ドゥルーエは、わたしのためにすべてを捧げ、すべてを犠牲にしてくれた。彼女が、あれほどまでにしてつくしてくれたおかげで、1851の12月のクーデタのときも、わたしは命を落とさずにすんだのだ。」

私たちは、マリーヌ・テラスの大空に、VHとJDのイニシャルが絡まりあう大胆なデッサンを思い浮かべざるを得ない。

ユゴーの性生活において、亡命期は女中たちの時代であった。彼をむさぼる性的な飢餓は、満たされてはいたが、密かな餌食を貪っていた。自分にふさわしい男、アカデミー会員、フランス貴族院議員そして崇高な書物の著者であるユゴーは、しかじかの社交界の夫人とともに弱さにゆだねていただけでなく、彼には台所の従業員との卑しい戯れがあると思われる。そのような汚辱は限界を超えていたという。ユゴー子爵は民主主義者になり、全ての女性は彼の目には等しいものであり、彼の性向は最も恵まれない女性に傾斜する。そして海の空気や広大な水は、太陽の輝きの下で、彼の中に何というディオニソス的な渇望を流し込むようだ。

実際、ユゴーは、人目を避けたランデヴーを、ファーメイン・ベイで娼



ヴィクトル・ユゴー「V.H. と J.D. が絡まる」(1852)

婦たちや大陸からの訪問者やきわめて貧乏な娘と行っていた。1861 年 10 月 18 日のノートには、「ファーメイン・ベイ、イヴルーズ公園の女、全部捕らえる、1 フラン 25」。1865 年 12 月 15 日は、「二人の娘が同時にパートナーになったが、愛撫だけだ。2 フラン」。1866 年 12 月には、パリ女の寡婦マリー・ゴドーは急行船で彼のところに来た。18 日に彼は彼女を受け入れ、23 日から腕の中に彼女を収めた。翌年、ルイーズ・ユン嬢がゲルヌゼー島を訪れ、6 月 14 日に彼の家に会いに来た。その晩、ファーメイン・ベイで再会し、次のように記している。「草の上。右手の人差し指でちくりと刺す。」1868 年 6 月、彼女は再び現れ、ファーメイン・ベイでは 4 度二人

は再会している。彼女はとても色白だ。1870 年 7 月彼女はまた現れ、ファーメイン・ベイが 4 度の出会いのための約束の場所になる。彼の通常の性的な消費は、マリーヌ・テラスやオートヴィルハウスの女中たちが、規則的に供給するだろう。彼は手帳に 1859 年と 1866 年の 2 度、これらの女性たちを列挙する。最初のリストには 15 人の名前が、二番目のリストには 20 人の名前が書かれている。ジュリー〈1853〉は難破で亡くなった。コンスタンス〈1856〉は気狂いになった。ロザリー〈1857〉、クリナ〈1858〉、マリア〈1863〉、デジレ（1865）は、4 人とも今は死んでいる。以上のようにアンリ・ギュイユマンは詳細に記している[12)]。

ユゴーは、これらの情交を特殊なメモ書きで、ジュリエットの眼からカムフラージュをしている。スイスと書くとき、ミルクを意味し、おっぱいは哺乳のためにできているからだ。「アンヌ：スイスの新しい眺め、1868 年 1 月 9 日」「午後 2 時、ヴィルジニ、料理女、鐘、女中、鐘、1868 年 7 月 30 日」「フィロメーヌ。両スイスを持ち上げる、1869 年 8 月 15 日」またよく「鐘、1 フラン」と書いている。「森と窪地を見た」〈11 月 9 日〉、「森　リエット　クランシュ。溝の奥の眺め。〈3 月 6 日〉と書くとき、リエットはマリエットの略、クランシュはルクランシュの略であった。1868 年 4 月 16 日に「リエットークランシュ　森を再見した」という言葉のあとに、19 日の以下の言葉「私は森まで行った。そこでショセ・ダンタンの隠者を確認した。」「1867 年 10 月 24 日：Y の右腕に出会った。草むら」固有名詞のカムフラージュも散見される。Anne が Ane に、Victoire Etasse が Victoria Road あるいは Queen に、Désirée が Desiderata に、キスに同意したマリアンヌは、Mar-Kiss となる。« Sec. A Eli Sabactani, n., 5frs » n. は Nue〈裸か〉を意味し、sec. は secours〈援助〉を意味する。Aristote は、女性の月経による具合の悪さを示している。Vu Aristote dans la forêt de philoméne.（フィロメヌの森の中にアリストテレスを見た）ユゴーは、女性たちに彼女らの体を眺め、触れ、所有することを要求して、その度合いで、お金を上げていたようだ。オートヴィルハウスで使用したゲルヌゼー島の貧しい女たちのときは、彼女たちを心配している様子が窺える。お金や冬支度のための石炭、服、地

面で寝ていた子供たちにはベッドなどを与えた。1858 年以来、ユゴーがしばしば愛撫した、女中の少女クリナの場合は感動的である。ノートでは、聖レジェと呼んでいるが、1860 年に病気になった。9 月 8 日「C. の病気が悪化」9 月 10 日「C. 寝たきりだ」9 月 12 日「コルバン博士が C. のために来た。」9 月 13 日「C. へのコルバン博士の二度目の訪問」14 日「私は、彼女がみんなの世話になることを勧めながら言った。＜家の中に病人がいるとき、病人は家の主である。＞と。」10 月 2 日「クリナは最期に隣の部屋で寝た。今朝 8 時半に彼女は私にさようならを言った。10 時半にラーレーヌーデージルよりオリニィ島へ出発した。わたしは彼女に私の肖像画と一冊の本と 24 フランを上げた。11 月 27 日、彼は彼女から涙でぬれた文字の一通の手紙を受け取る。そこには彼女が熱烈にユゴーを愛していると書かれていた。1861 年 1 月 23 日「オリニィ島のクリナ；彼女は全く寝たきり。」2 月 6 日「クリナの悪い知らせ」2 月 11 日「クリナ少々良くなる」3 月 3 日「クリナは最悪だ。彼女は、最期の秘蹟を受けたと書いている。」3 月 17 日「私はクリナがオリニィ島で、3 月 7 日木曜日に亡くなったという知らせを受け取った。」実際のところ、Saint-Léger, Vulgivaga は、クリナが娼婦であったことを意味した。Vulgivaga は、ルクレチウスにおいては、娼婦であった。ユゴーは 1860 年 7 月 15 日に彼女と寝ており、同じ日に、5 フランを与えている。« Sec.à S.-Lég.pr.5 frs.La vérité »「援助、聖レジェに、5 フラン。真実」とユゴーは記している。

亡命期のユゴーの性愛は覗きの性愛だった。女中の胸や完全な裸体を彼の眼差しが必ずしも捉えたわけではない。1853 年 3 月 13 日「カトリーヌ、ランプの明かりの下で裸体」1863 年 1 月 4 日「鍵穴、マリアンヌ、初めて」ユゴーは、オートヴィルハウスに二つ寝室を持っていた。一つは豪華な寝室だが、ほとんど寝ることはなかった。もう一つは、家の最上階で、召使たちと同じ階で、狭く、小さい寝室であった。目の前にあるもの全てを、眼差しと手でつかむ。1856 年 7 月 21 日「ソフィーの胸を触った」、7 月 22 日「コンスタンスのものを見た」7 月 23 日「マリアンヌのそれを触った」8 月 24 日「ジュリーの一つと二つを見てつかんだ」これらはオートヴィルハウスに

使えている女中だ。女性のからだへの肉欲に苦しめられているユゴーは、姦通にしか身をゆだねないのだ[13)]。

亡命時代が終わって、パリに戻ると〈1870年9月5日〉、女優時代が到来する。若い女たちが老人の欲望の的となる。ファヴァール、エリクール、ルイーズ、ダヴィド、ルスイユ、ロクール、ペリガ、サラ・ベルナール等で、他にも訪問者があとを絶たずであった。エロティックなノートには、poële, garter, genua, osc.Suisse, n, entorse などが暗号よろしく記されている[14)]。

18歳の若い女マリー・メルシエは、錠前屋モーリス・ガローの妻であった。ガローはマザ刑務所の所長でもあったが、ヴェルサイユ軍に逮捕され銃殺された。ガロー未亡人であったマリー・メルシエは、ユゴーのところで女中として使ってもらうようお願いした。まだ喪があけないうちに、ユゴーとマリーは愛人関係になってしまった。彼女はユゴーを深く愛し、崇拝し、尊敬し、彼の子供を生みたいと願っていたらしい。ユゴーの要請にしたがって、マリーはウール川で素裸のまま水浴したり、近くの山に登って愛し合った。ユゴーは若い女性を征服することで、精神が刺激を受け、見事な詩句を生み出していったのである。1871年9月3日「マリア、脚、愛してくれているらしい。」9月11日「彼女に子供を生ませたい。」9月12日「いまや毎日毎時間つねにマリア」9月22日「同じ―何もかも全部」これらは、すべてスペイン語で書かれており、ジュリエット・ドゥルーエには分からない[15)]。

サラ・ベルナールとの出会いは、ユゴーの戯曲「ルイ・ブラース」の女王役をサラが演じたことがきっかけだった。初演の日、ユゴーとサラは愛撫しあった。1872年2月20日「大入り満員。サラ・ベルナールに会い、祝いの言葉を述べた。接吻。ユゴーは彼女を「黄金の声」という異名をつけ、彼女は彼を「愛しい怪物」と呼んだ。1875年11月2日　S.B. No sera el chico hecho ヴィクトル・ユゴー73歳で Sarah Bernhardt サラ・ベルナール31歳のときであるが、L’enfant ne sera pas fait 子供は出来ないだろう[16)]、と『見聞録』に記されている。1877年に『エルナニ』でドニャ・ソル役を演じたが、ユゴーは、「あなたは1830年のときのマルス嬢を凌駕し、圧倒した。あなたは自分で女王の冠を、二度美による女王、才能による女王という冠をかぶ

った。」と宣言した。1885年、凱旋門からパンテオンまでのユゴーの棺に、家族のあとに、たったひとりで、サラ・ベルナールは従った。

もう一人忘れてならぬ女性は、テオフィル・ゴーチエの娘で、カチュール・マンデス夫人ジュディット・ゴーチエである。ユゴーは70歳で、彼女は22歳だった。テオフィル・ゴーチエとエルネスタ・グリジの娘は、1866年に結婚後、ユゴーに中国語から翻訳した詩集『翡翠の書』を献じた。1872年には、二人は頻繁に会っていた。というのも、テオフィル・ゴーチエが、病床にいたからだ。1872年8月11日に、ユゴーはジュディット・マンデス夫人を征服している。ユゴーはジュディットに、「ようこそ、女神、死に行くものはお前に挨拶する」という詩を書いた。

サラ・ベルナール 1877年（ナダール撮影）

死と美は二つの深いものである
沢山の闇と蒼穹を含んでいて
まるで同等に怖ろしく豊穣な二人の姉妹だ
同じ謎と同じ秘密をもっている

おお　女たちよ！　声　眼差し　黒髪　ブロンドの編み毛よ
輝け、私は死ぬほど恋しい！輝きと愛と魅力を持ちたまえ、
おお　海の波間に混ざっている真珠よ
おお　小暗い森の輝ける鳥たちよ！

ジュディットよ、私たち二人の運命は互いに近い

私の顔とあなたの顔を見るならば
あなたの目には神々しい深淵が現れるのが見え

そして私の魂には星屑が散りばめられた深淵が感じられる
私たちは二人とも天空に近いところにいる、マダム
だってあなたは美しく、私は年老いているのだから。

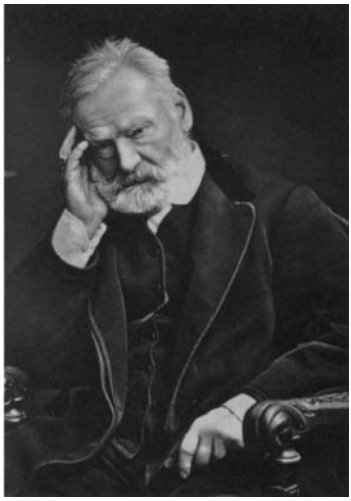
1870年ごろのジュディット・ゴーチエ（1850-1917）

死と美、老人と美女、老人の魂と女性の眼、一見対立するものを一致させるユゴーの詩学に、捧げられたジュディットの心は感動しないでいられようか？　父テオフィル・ゴーチエは、エルナニ論争のときは、赤チョッキを着て、ユゴーを助けるべく戦ったのである。彼が病魔に冒されいる今、ユゴーが援助するときである。医者を紹介したり、恩給を獲得させたりはした。だが娘ジュディットの魅力にはユゴーは勝てなかった。『リュイ・ブラース』の一節を使って、彼女は、「先生、＜あなたの足元の、暗闇に、男が立っています。彼は待っています。＞　私は考えました。そして決心しました。ありがとうございます。ジュディット・M」ジュディットはヴィクトルに全てをゆるした[17]。

1872年8月7日ユゴーはゲルヌゼー島に向けて出発した。そこには、ブランシュという22歳の女性がジュリエットの女中としていたのである。

彼女は私に聞く、「下着のままでいい？」
私は彼女に言う。「女性は素っ裸かに限るよ。」
おお、束の間の春の日々よ！

ブランシュ



ヴィクトル・ユゴー 77 歳

笑いで始まり　夢想で絡る
喜びよ！　仮面をはずしたアスタルテ。恍惚よ！覆いをぬいだイシス。
『大洋』59『裸婦』

ブランシュは、スペイン語でアルバなので、アルバと呼ばれていたが、ジュリエット・ドゥルーエの嗅覚よろしく、ユゴーとの関係が見破られ、暇に出されてしまい、パリに帰ったが、ユゴーがパリに戻ったとき、再会し、何もかも彼に許したのだった。これほどまでにユゴーの性的な欲望は激しかったが、おのれの非行や罪深い行為に対して彼はどう思っていたのか。良心の呵責がなかったのだろうか。しかし、肉体の誘惑に負ける悲しむべき人間の精神を歌うユゴーは、おのれの弱さを露呈したのか？「肉欲こそ隠れた暗礁、最もすぐれた人間精神でさえ、戦慄しながら意気阻喪し敗北する終焉の地である」と、否定的に扱っているが、それでも古来賢者たちも肉欲には勝てなかったと、『大洋』詩篇で歌っている。ブランシュからインスピレーションを受けて詩篇やデッサンを創造する、こういうユゴーのクリエイティブな力は驚嘆に値するだろう[18)]。

ヴィクトル・ユゴー「明るいランプ光の下の裸体」

すでに見てきたように、ユゴーはしばしば愛欲の対象者に援助金としてお金を上げている。貧しい女中や娼婦たちに援助金を与え、Sec.5 francs といった具合に、その金額を記録していた。おのれの肉欲の対価なのだろうか？いずれにせよ、亡命時代以降、愛とセクシュアリティは、ユゴーにあって、断絶していたということか？　しかし、他方、少女クリナのように、ユゴーの愛に感動し涙し、死ぬまで感謝し続けた女性もいる。

そうした愛の行為の生々しい記憶を胸に秘め、あるいは『見聞録』に記録し、時には暗号めいた、自分にだけわかる記号を使って記録していた。そうした記憶や記録が、やがて様々な詩句となり、『レ・ミゼラブル』のファンチーヌやコゼットやエポニーヌに、『笑う男』の皇女ジョジアーヌに変貌し、形作られるのだ。いわば、ユゴーが愛した女性たちはすべてミューズであったといっても過言でないだろう。

ユゴーはいつも逸脱する人間だった。性欲と理性とが対峙するどころか、互いに相乗効果で高めあう関係にあった。ユゴーは、レオニー・ドーネとの姦通事件以来、何度となく＜心の自由＞を唱え、姦通を正当化しようとした。

1853 年 7 月から 9 月にかけての記述のなかで、

「奇妙なことだが、進歩の 18 世紀のあと、精神の自由が表明されているが、心の自由は表明されていない。

愛するということは、やはり考えること以上に人間の大きな権利なのだ。」

と、『見聞録』のなかで言っている。

1857 年 7 月以降のノートにも、

「考える自由；愛する自由。前者は人間の精神の権利；後者は人間の心の権利である。異端と称するものと姦通と称するものとのあいだには同一性がある。

いったいいつ良心が平静になれるのか？

なんだって！あなたがたは神による人間の法的な所有を放棄し、女性による男性の、あるいは男性による女性の法的な所有を認めるのか？結婚は宗教より不可侵なのだろうか？　部分は全体より大きいのか？

神聖なものは二つしかない。宗教においては信仰。結合においては愛。

信じなさい。愛しなさい。このことが法のすべてである。」

1860 年のノート

「完全な個人、それは男性と女性それに子供である。したがって、男性の権利のほかに、女性の権利がある。女性の権利、それは隷属状態がもうないことだ。（心の自由はやはり精神の自由と同じくらい神聖である。）……」

「私の私生活はまさしく私の名誉である。私は今世紀に存在しており、死ぬまで愛する自由の主張者になるだろう。愛する自由は考える自由と同じ権利である。一方は、心に呼応し、他方は精神に呼応する。これは、良心の自由の二面である。それらは人間の魂の最も奥深い聖域にある。どんな神を私が信じるか、どんな女性を私が愛するか、いかなる人も問い合わせる権利はない。今日の結婚が、今日の宗教が宗教である以上に、結婚であるとはいえない。今日の盲目な人たちが姦通と呼んでいるものは、昔の盲目な人たちが異端と呼んでいたものと同一である。」

「私は単に自然の権利の中にいたのだが、それは社会の権利より上等なものである、それが人間の心の自由である。

あなたはあなたの夫とは別の男性を愛するのか？　では彼のところに行きなさい。あなたが愛していない人、あなたは彼の娼婦だ。あなたが愛している人、あなたは彼の妻である。性の結合において、心が法則なのだ。自由に愛し考えなさい。あとは神さまが見ている。」

「法律が権利に反するとき、その法律に抗議する英雄的な方法しかない。すなわち法律を犯すことだ。

それが、子供を父親の所有物にし、妻を夫の所有物にし、神を司祭の所有物にする法律なのだ。

異端と呼ばれるものと同様に姦通と呼ばれるものは、自然の権利である。」

「持参金と呼ばれるあの売買とともに、夫と呼ばれるあの暴君とともに、作られているような社会において、姦通は、女性の隷属状態に反し、結婚の横暴に反して、自由の中で第一のもので、最も神聖な自由、愛する自由の主張にほかならない。

アナーキー的だが正統な抗議だ。激しく、不規則なものだが、自然そのもののように深く抑えがたい抗議だ。

姦通：反抗と法則。」

1862 年

「あなたは私にあの事を思い出させる。なぜ一つなのか？　私がいわゆる犯罪を犯したのは、一度ではなく、二十度だ。年老いて孤独な私は後悔しかもっていない。もうあんなことは犯さないことだ。今、おお私を取り巻く立派な偽善者たちよ。私は初めての石を待っている。

私がどこかで言ったし、繰り返したが、愛する自由は考える自由と同じくらい神聖である。このことはすべての社会的な慣習を超えている。権利が法律を凌駕している[19]。」

ユゴーは、あの姦通事件を正当化すべく何度も繰り返し、愛する自由、心の自由、そして姦通を擁護している。特に亡命時代には、ジュリエット・ドゥルーエの眼を盗んで、若い女中や貧しい女性や娼婦にも愛の手を差し伸べており、あらゆる女性に平等に愛の営みを行っている。そしてユゴーは自分

の側からだけでなく、女性の側からの愛する自由を、すなわち女性の権利としての心の自由を、すなわち姦通を、不倫を正当化するのだった。ユゴーは、社会法則より自然法則を優位に置いている。法律よりも権利を擁護している。妻は夫の所有物といったナポレオン法典の考え方に抗議している。夫の暴君や結婚制度の横暴さに、否と宣言している。そして女性の権利、子供の権利を唱えるのであった。

1872年6月8日、パリで、『女性の未来』誌編集長レオン・リシェ宛てへの書簡は、ユゴーがいかに女性の社会問題を解決しようとしていたかが窺える。少し長い引用となるが、ユゴーの個人的な体験が、社会化されてよりポジティブな言説に昇華された形を見ていただきたいと思う。

「こんなことを申し上げるのは悲しいことです。つまり、現代文明にも奴隷がいると。法律は婉曲語法を用います。私が奴隷と呼ぶものを、法律は未成熟者と呼んでいます。法律が示すところの未成熟者、現実が示すところの奴隷、それが女性なのです。法律という秤の二枚の皿の上に、男性は不釣合いな重さをかけてきました。その秤が釣り合うことが人間の良心にとって重要であるにもかかわらず、です。男性は自分の皿にはありとあらゆる権利を載せ、女性の皿にはありとあらゆる義務を載せているのです。これが大きな間違いのもとです。これが女性の隷属の原因です。わが国の法律のありのままを見ますと、女性には所有権がなく、訴訟権がなく、選挙権がなく、物の数にも入っていませんし、存在してもいないのです。男性市民はおりますが、女性市民はおりません。こんなひどい状態なのです。それを解消しなくてはなりません。……

しつけの問題。抑圧の問題。結婚から取り除かなければならない、離婚禁止という問題。刑法から取り除かなければならない再審不可の問題。非宗教で無償の義務教育の問題。女性をめぐる社会問題。子供をめぐる社会問題。こうした問題について、為政者たちが目を覚ます時が来ているのです。……

……ますます意志を強固にして、女性をめぐる悲愴な問題をあらゆる面から検討しましょう。女性をめぐる問題さえ解決したら、社会問題のほとん

どすべてが解決したことになってしまうほどなのですから。この問題を検討するには、正義を持ち込むだけでは足りません。尊敬の念を持ち込みましょう。同情の気持ち持ち込みましょう。よろしいですか！その肉体からわれわれを形作り、その血液によってわれわれを生あらしめ、その乳でわれわれを養い、その心でわれわれを満たし、その魂でわれわれを照らした人間―聖なる人間―がいるではありませんか。その人間が苦しんでいるのです。その人間が血を流し、涙を流し、憔悴し、震えているのです。ああ！身を捧げましょう。その人間のために尽くしましょう。その人間を守りましょう。その人間を救いましょう。その人間を擁護しましょう。われわれの母親の足に口づけをしようではありませんか！

……男性だけでは人間は成り立ちません。男性に、女性が加わり、子供が加わって初めて、この、三つでありながら一つである三位一体の存在が、真の人間の単位を形成するのです。社会機構の全体がそれを前提としなければなりません。この三つの形のいずれにおいても人間の権利を保証すること、それが法律とわれわれが呼ぶ地上の摂理の目的となるべきなのです。

……教育の光の当たらないところに子供が放置され、女性が発言権のないままでいて、後見の名に隠れて隷従がまかり通り、肩がか弱いほど担ぐ荷が重くなるといったことが続く限りは、です。女性の苦しみの上に、男性の幸福を成り立たせるというのは、男性自身の自尊心からしても、無理なことだときっと認めてもらえるでしょう。」（稲垣直樹訳『言行録』in「ヴィクトル・ユゴー文学館　第九巻」p.347、潮出版社、2001）

参考文献

sankei.jp.msn.com/world/europe/080116/erp0801162322010-n1.htm - キャッシュ

Olympe Audouard : *La guerre aux hommes,* E. Dentu, 1866

Raymond Escholier : *Un Amant de Génie, Victor Hugo,* Fayard, 1979

Pierre Gaspard-Huit : *Hugo un satyre de génie,* Edition Menges, 1985

Albine Novarino : *Victor Hugo/Juliette Drouet Dans l'ombre du génie,*

Acropole, 2001
Françoise Lapeyre : *Léonie d'Aunet,* JGLattès, 2005
Juliette Drouet/Victor Hugo : *Correspondance(1833-1883),* fayard, 1985, 2001.
Henri Guillemin : *Hugo et la sexualité,* Gallimard, 1954
Claude Malécot : *Le monde de Victor Hugo vu par les Nadar,* Editions du patrimoine ; Paris, 2003
Victor Hugo : *Choses vues 1849-1869,* folio, Gallimard, 1972
Victor Hugo : *Choses vues 1870-1885,* folio, Gallimard, 1972
Victor Hugo : *Choses vues, souvenirs, journaux, cahiers, 1830-1885,* Quarto, Gallimard, 1972
アンドレ・モロワ、辻・横山訳：「ヴィクトール・ユゴーの生涯」新潮社、1969
稲垣直樹訳「言行録」in「ヴィクトル・ユゴー文学館　第九巻」潮出版社、2001

注

1）sankei.jp.msn.com/world/europe/080116/erp0801162322010-n1.htm
2）Henri Guillemin : *Hugo et la sexualité*, p.13
3）Akio Ogata : *Une étude sur le premier roman de Victor Hugo* ; The Hiyoshi Review ; No : 27, 1981
4）Raymond Escholier : *Un Amant de Génie,* Victor Hugo, p.110
5）アンドレ・モロワ：「ヴィクトール・ユゴーの生涯」p.336
6）Françoise Lapeyre : *Léonie d'Aunet,* p.67
7）Raymond Escholier, Ibid. p.258-277
8）Hugo : Choses vues, p.482-486
9）Raymond Escholier, Ibid. p.253
10）アンドレ・モロワ、同上、p.392
11）アンドレ・モロワ、同上、p.397
12）Henri Guillemin, Ibid. p.69-71
13）Ibid. p.83-90
14）Ibid. p.100
15）アンドレ・モロワ、同上、p.550

16）Victor Hugo, *Choses vues 1870-1885,* P.371
17）Raymond Escholier, Ibid. p.497-498
18）アンドレ・モロワ、同上、p.562-567
19）Victor Hugo : *Choses vues 1849-1869,* p.242, p.333, p.352, p.356, p.357, p.375